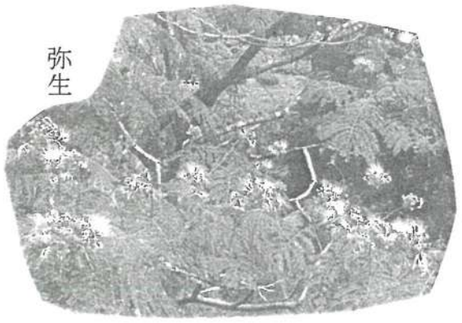
高志の生紙通信

第57号
2022年7月25日 発行
越後 門出和紙 小林康生
〒945-1513 新潟県柏崎市高柳町門出
☎0257(41)2361Ⓕ0257(41)3024
e-mail info@kadoidewashi.com
http://www.kadoidewashi.com
年4回発行 年会費920円

弥生



7/20
生紙工房脇のネムの花の盛り

雪も降り止まり、雪堀りも無くなったので、久しぶりに作業棟を片付けていたらあちらこちらに使い切れていないクロモジの皮が・・・。勿体ないので染めてみることにただ、漉き場が立て込んでいるので引き染めや浸し染めにすることにした。通常、紙屋は紙屋しかできない先染め（原料で染めてから紙にする）なので後染めは珍しい。

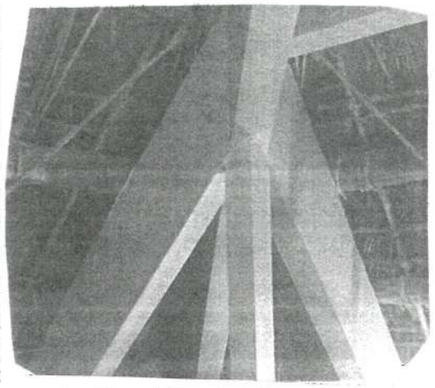
先染めの時のクロモジは上品なあずき色に染めるのですが、皮が古いのと後染めで柿渋のような濃色に染まった。引き染めでは使い切れない量があるので大きな容器に入れて浸し染にした。刷毛と刷毛の間を気にすることなく早くて全体がムラなく染まる。ただこの時、紙の古い新しいで全然染まる速度が違うのに驚いた。二十年以上過ぎた紙は中々水が入っていかない。枯れて丈夫になってはいるが同じように作った紙でも原料の違いを超える新しい紙と古い紙との違いを自覚することになる。

たまたま、映画のスクリーンを依頼されて光を通さないため裏紙を墨に染めた。その余り液と組み合わせたら何とも面白いにじみ模様が現れた。ならばキハダやタンガラなど組み合わせて、重ね染めすると思ってもみない自分の作為など全く介入を許さない表現が現れるのでしばらくすっかりはまってしまった。

昨年と同じ三メートルの積雪であったが、少し春先寒いのか雪消えが十日ほど遅れている。田ごしらえのための農道除雪に責任者の方は駆けずり回っている。

かやぶき集落の荻ノ島、陽の楽家。二十三年前、隈研吾さんと初めての仕事、田んぼの中のかやぶきは、床に座れば稲穂に触れる目線、柱、外壁、床、太鼓張りの障子とすべてを和紙で包んだ実験的な館は、すこぶるじょんのびな荻ノ島の景観ではあったが萱の軒先二メートルは無理があり、雪に垂れ下がってしまった。また春先の結露で雨もり状態になり、床はシミだらけ、柱にはカビが・・・。しばらく使用不能であったが、ようやく修理が始まり、春先から壁や柱、障子の和紙の全面張替えに和紙を提供し、予算が厳しいので自営でやることになり、その張替え作業の指導で何度か駆け付けた。

橋本青年は、大阪から学生時代に農村体験でやってきて卒業後、この地に住み着いた。朝の新聞配達から冬は地元の酒蔵で酒造り、農業、そして主力は、かやぶき職人の見習いをしている。



3/9　陽の楽家　サス柱の和紙貼り

昨年、紫乃さんと結婚して二人でこの陽の楽家でカフェをやることに。我が郷土の希望でもある。やれることはやってあげたい。

残雪の良く晴れた穏やかな昼、かやぶき家の前に二人のばあさんが冬から抜け出た陽ざしの中、しゃがみ込み、終えることのないおしゃべりだ。はしき（洗濯物を干す又木で軽くまっすぐなコシアブラの木などを使う）を残雪に差し、そこに物干し竿、かるい布団や洗濯物が春風に揺れて雪国の「のどけらまし」じょんのび風景である。昔ならここにオシメなどが風にたなびくことであろうが、今は子どもがいない・・・。というよりパンパースになり美しい情緒の風景は望めなくなった。二人は友人たちの手伝いも借りながら紙貼りを終え、美しく生まれ変わった陽の楽家で八月にカフェをオープンする予定だ。

卯月

八日、「月刊・公論」（七月号）のリレー対談で久しぶりに青山の隈研吾建築都市設計事務所を訪れた。事務所の中は外国人スタッフが多くなって、英会話が飛び交い驚いた。

いつもの屋上の気持ちの良い来客スペース、自分のいつものペースで話が進められてありがたかった。それにしても何で自分なんかを指名してくださったのか・・・？

その後、日本橋の小津和紙さんを訪ね（二年前に展示会を予定していたがコロナ禍で中止）八月八日からの週が空いていることからギャラリーの予約をして帰ってきた。

文月

主力の久保田ラベルの生産がジリジリ増えてきた。いよいよその他の注文の紙をやる余裕がなくなってきた。

昨年十月、松代町犬伏集落（伊沢和紙）の山本貢弘さんが急死・・・。四十歳奥さんからの連絡を受け、前日まで漉いていたラベルの紙床などジャッキにかけて残った原料など我が工房に移動した。五歳のツムギちゃん、お腹に双子の赤ちゃんを宿しての旅たちで何とも何とも切なく残念でならない。

彼は十五年ほど前、我が工房で研修をして地域おこしのグループで太鼓「欅の会」が作った新工房で紙すきをスタートさせた。久保田のラベルも手伝ってもらって助かっていたのに。

結局、山本さんのご両親の勧めもあって、その工房を門出和紙スタッフ、七年目の小嶋紘平さんが引き継ぐことになり（東京生まれ、父親が犬伏出身）

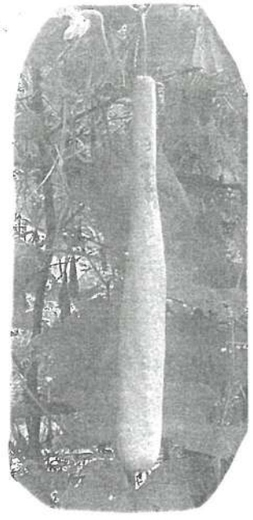
同じく、当工房のスタッフである奥さんの祐希さんと4月に退社。門出和紙の仕事も手伝いながらの出発である。そんな訳で慢性ぎっくり腰の我が身も数年ぶりに時折、紙漉き場に・・・。

7/16　菊田さん、布施さんたちと・・

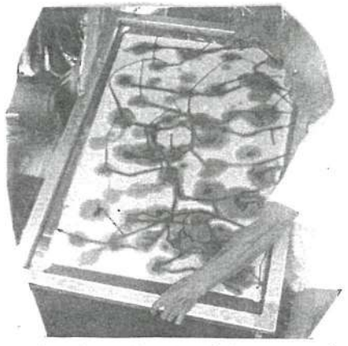
七月は何といってもネムの花が一番似合う。昨年より十日遅れのちょっと気取った淡いピンクのかんざし。

ようご（ユウガオ）の「クジラ汁」もありがたい。近年、クジラ肉は高級でコリコリようやくかみ切るほどの歯が喜ぶのが少なくなってきた。とろりと浮かぶ、ゴテゴテの油は夏バテを吹き飛ばす郷土料理だ。それと「ナスがらみ」、シソと味噌を入れて油で炒め、最後になんばん（唐辛子）を加える。その辛味で飯が何杯でも食べられる。そして、キュウリをツイテ（スライスラーで薄く）味噌、ネギ、シソを入れた「冷やし汁。」この三つは我が家の夏の定番料理になっている。

そんな訳で毎年、ユウガオ、ナス、キュウリに至っては、早生、中手、奥手と三段階構えで自ら目を光らせ育てている。



7/25
生紙工房裏の畑
長さ八〇センチ位の夕顔



古い紙は水が浸透するまで時間がかかるのでその間に溜まった染液を転がす

十日、沖縄のヤンバルより日本画家の菊田一朗さんが一週間、当工房で墨とドウサのにじみ加減などをテストしてみたいと来られた。生成りの素朴な紙を求められていたが、結局十数年ねかせた雪晒し、木灰煮、板干し天日乾燥の生紙が一番だったようで「宝物ですね」と言って買われた。

十四日、折り紙作家の布施知子さんが一緒に創作される仲間三人を連れ立って合流、二泊三日の染色体験でやって来られた。十年前、ヨアンナ（フランス人）を我が家に送り込んだ方で日本より海外の方々に良く知られた作家さんです。出身が長岡なので来年、アオーレ長岡で展覧会を計画、自分も少しお手伝い。

生紙工房脇の作業棟を使って二人の作家さんたちの交流は何ともみんなを意気投合させた。今後が楽しみである。

《あとがき》

一年ぶりの生紙便となり、いつもならイベント情報を入れるため女房の執拗な催促があるのだがそれもなく楽々していたのですが、小津和紙さんでの展覧会が迫っている。楮の脇芽は伸びる、来客があったりと工房スタッフに余裕がないので一人で駆けずり回っている。取り敢えず案内状をという、焦りながらの発行となりました。

展覧会が無事に催されるのか？コロナさんを睨みながら。先ずはやれるだけのことは進めていこう。

暑い夏、お体ご自愛下さいませ。

康生

小林康生

紙漉き半世紀を振り返って

過ぎてみれば早いもので、紙屋稼業も半世紀になります。我が家はわかっているだけで、与吉、増太郎、末代吉、栄一と自分が五代目になります。父の代までは百姓の傍らで春祭りにはお金に換えていたようです。当時は唐傘や大凧用の紙で半紙判の小さな紙でした。地元にも問屋との間を取り次ぐ紙買いがいたそうです。

生紙（きがみ）は、冬季の寒さと雪を活かした時期こそ結合度も強く、原料も雪に埋めておけば腐る心配もなく、じっくり仕事に打ち込める、紙にとってはプロの仕事。自分のように私の都合で一年中、生業とする方がアマチュアとも言えます。

自分が始めたころ、日本全国で約、千戸ほどだった紙屋が八百戸ほどになるのにわずか三年。とんでもない世界に飛び込んでしまったことに気づき、驚きましたが、気持ちがブレルことはなかった。

先ずは楮畑の開墾、作業所の建築資金のため冬に出稼ぎを三年。各産地をよく訪れましたが、弟子入りをしなかったので只々失敗を先生に・・・。失敗の数が多いほど推測力が増し、今思うとそれはそれなりに良かったような気もします。始めた頃は、自分の個性を紙に宿らせたいと思っていましたがその後、素材作りをしているのだから使い手が喜ぶ紙を目指すようになります。

四〇歳を迎えるころから販売されている和紙がすでにニジミの加減や白さなど、化学処理されたものが当たり前になって例えば自分の育てた楮に、化学漂白するとき、見る見る白くなるにつれ繊維の劣化も進み心を痛めるようになりました。また塩素漂白の威張っている白色と自然の光を紙が受け入れ、柔らかな色を超えた光の白の違いなどに気づいてくると、もはや自分の育て上げた楮が不敏に思えてきて「楮がなりたい紙」に従う紙作りと切り替えることにしました。

五〇歳の時、新たに建築した工房はあえて「生紙工房」としました。子どもの頃から慣れ親しんだ名前です。そもそも紙屋を始めたばかりの頃、問屋さん周りをするとこの和紙は洋紙が何割入っている?と聞かれた。木材パルプを洋紙と呼び、三割までだったら見破られないとも。十割楮を敢えて純楮紙と言っていた。

そしてやがて機械漉きが主流となり「手漉き和紙」と呼び、手漉きでありながら新聞紙十割のだるま紙などもあり、「伝統手漉き和紙」などと時代とともに名前はどんどん追いやられてきた。考えてみれば、明治に洋紙が入ってきてそれと区別するための「和紙」であってみればその範囲も時代に合わせて拡大していく。何とも悔しいところではあるが、やがて日本で作る紙、全般を意味するのかもしれない。

ただ、自分は見学者に対して必ず言うのは「植物の靭皮繊維を十割入れたものでなければ和紙と言えない。それが洋紙の十倍以上の寿命そして強度や柔らかな光沢を生むのだから。」と説明します。

和紙と洋紙の境界線が樹皮を使うところにあります。そして生紙は洋紙に対して名付けられたのではないので洋紙の入った生紙は絶対許されないとも言っているところです。

我が、父の代までは、紙を作ればそれを黙っていても使う人がいて、紙買いが来て売ればよかった。

自分の代に入ってからは、自ら売り先を見つけなければならない。それでも歩けば自分が作る紙程度は売れた。

紙の良し悪しを論ずる人もいた。次第に生活の中で手紙も出さない、障子の間も少なく、日本人の生活スタイルが変化してきた。和紙に限らず日本から日本がどんどん消えていく。

本物（自然のもの）はすべて命を宿し呼吸するもの、木々も土壁も紙も日々の湿度に伸びちじみをしながら丈夫に育つ。百年もしたら煮ても解けない丈夫な紙になる。時代とともにどんどん便利や快適を追い求めそれを文明と呼び、もはや自然の子どもから親を目指し始めているようです。自分が育て上げた楮を求める人は限られた数人となり、造る（文明）紙と育てる紙（文化）との折り合いどころが怪しくなってきました。

六年前、建築家の隈研吾さんからフランスのエマニエルさんから金属物を紙に漉けないかと依頼があり、お声を掛けていただいたときにもどうしようかと迷った。

自分にとって金属物と楮のコラボに無意識の抵抗があった。しかし、楮は元々着る物やロープに使われ、日本に紙が伝わる一四〇〇年ほど前から紙の原料に使われ始めたのだった。一方今日、住宅建築に金属が使われているのだから、必然的にコラボしなければならないのだが、自分の心が追いつけないだけ。始めてガラスを見た時代の人と同じなのである。やがて違和感もなくなるのであろう。また、六十一歳まで門出和紙の親方をしていた時には、自分は素材を作る職人の立場なのだから作品は作らないと決めていた。

紙を使う方が、お前の紙は使えないからと作家が紙を漉いたり、また紙屋が作品に手を出し、あの作家は自分の紙の活かし方を知らないなど思ったらお互いが尊敬できなくなると思っていたからだ。しかし、今日の時代背景を考えるとき、あまりの減少化は今後の紙漉き、また作家はその垣根を超えることも必要な時代に入ってきたようにも思える。

文明の一つの手段である細分化によって、効率性や専門性が求められているが歯車の一つでしかない。元々昔の人々は守備範囲が広く何でも熟した。

伝統技術も櫛の歯が欠けたようにその穴埋めのため、手漉き用具つくりの方々もここまで少なくなると年々守備範囲は広くなっています。紙漉きがその使い手とお互い手を取り合うのは必然の流れなのかも知れない。そんな交流スペースを持った空間つくりも必要となるかも知れない。従って、その使い手の立場にも紙屋が寄り添い、お互いの垣根を外すことも。今日、生紙は生活必需品ではない、強いて言えば心活必需品とでも。伝統は伝承を時代の中で進化させなければやがて消えていくのだが、一方、紙になるために神が授けてくれたような楮という植物。先人たちが究極の美しさ、強さを生紙として結実してくれたものをいつの時代の人々にも分かち合えるようにしておきたい心もある。

門出和紙の存在意義はこの雪深き門出で産するところにある。ところが門出集落があと何年存続できるだろうというところまで迫っている。自分の役割は生紙を残すことと、この生まれ故郷を存続させることにある。現在の雇用も維持したい、都会とは違う重い意味を持っていると思うから。

人が最も幸福を感じるのは「分かち合いたいと思う心」の中にあり、それは昔と今と未来を分かち合うことで根は繋がる。従って、いつの時代も人は自然の子どもであってほしい。人の五感の中に真の豊かさが宿っている。正常な五感は自然が育むものだ。

自分が生まれた変貌する時代、たまたま紙すきを仕事とし、やがて消えようとする郷土を考慮するとき共通することは畢竟、人が自然に寄り添う暮らしを提案し続けることが我が残人生のやるべきことと思う。

二〇二二年文月二十五日